



変化への備え

暗唱
聖句

「正義は御前を行き／主の進まれる道を備えます」

(詩編 85：14、新共同訳)

「義は主のみ前に行き、その足跡を道としましょう」

(詩篇 85：13、口語訳)

今週の
聖句

Iコリント 10：1～13、創世記 2：24、Iコリント 13：4～8、
サムエル記上 1：27、詩編 71 編、Iコリント 15：24～26

安息日
午後
4/13

今週のテーマ

人生は変化に満ちています。物事は絶えず変わります。唯一変わらないのは、変化という現実そのものです。実際、変化は私たちの存在の一部です。物理学の諸法則は、現実のほとんどの基礎構造の中に変化が存在すると教えているように思えます。

しばしば、変化は思いがけなく訪れます。いつもどおりに進んでいると、突然、一瞬にしてすべてが変わり、私たちは完璧に不意をつかれるのです。

一方、私たちは時として、変化がやって来るのを知ることができます。物事が変化しそうであることを知らせる事前警告、しるし、指標などが与えられるからです。それらを与えられたなら、できる限り、やって来るとわかる事柄に対して準備を始めることが賢明です。このような変化の多くは、大きなもの——結婚、子ども、高齢、死など——でしょう。

確かに、私たちは孤立して生きているわけではありません。従ってそれは、私たちに生じる変化が私たちの家族に影響を及ぼすということ、しかも大きく影響することを意味します。同時に、私たちの家庭における変化も、家族1人ひとりに影響を及ぼすのです。

今週私たちは、遅かれ早かれ、何らかの形で、たいていの人々が遭遇する変化について、またその変化が家庭生活にどう影響するかについて考えます。

聖書について言えることが一つあります。それは、聖書が人生の現実をごまかしていないということです。それどころか、聖書は現実のあらゆる厳しさを、ときには、苦悩と絶望そのものをさらけ出しています。実際、聖書の最初と最後の数ページを除けば、神の言葉が描いているのは、人類の悲しい姿です。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっています」（ロマ3:23）と記したとき、パウロは誇張していたわけではありません。

問1 Iコリント10:1～13を読んでください。そこには約束とともに、どのような警告がありますか。

いろいろな意味で、人生における私たちの行動の多くは、変化に対する反応にすぎません。私たちは絶えず変化に直面しますが、クリスチャンである私たちにとっての課題は、信仰によって変化に対応し、神を信頼し、（そうしたくないという誘惑にもかかわらず）服従を通してその信仰をあらわすことです。

「世界で最も欠乏しているものは人物である。それは、売買されない人、魂の奥底から真実で、正直な人、罪を罪とよぶのに恐れぬ人、磁石の針が南北を指示して変わらないように、良心が義務に忠実な人、天が落ちかかろうとも正しいことのために立つ人、——そういう人である」（『教育』54ページ）。この言葉は、古代イスラエルにも、エレン・G・ホワイトの時代にも、そして現在の私たちにも当てはまります。

問2 次の聖句の中で、人々は変化を前にしてどのような間違いを犯しましたか。彼らの間違いから、私たちはどのような教訓を学ぶことができますか。使徒5:1～10、創16:1、2、5、6、マタ20:20～22

変化が生じると、それらはしばしば誘惑や挑戦を、ときとして恐れさえ、もたらします。それゆえ、適切な方法で変化に対処するために霊の武具を身に着けることは、なんと重要でしょう。重ねて言いますが、変化が予期せぬものであれ、人生の典型的な部分であれ、私たちは、見えるもの、見えないものにかかわらず、やって来る事柄に備えることが必要です。

人が直面する最も大きな変化の一つは、結婚するときです。言うまでもなく、すべての人が結婚するわけではありません。何しろ、私たちの最大の模範であるイエスは、結婚されませんでしたし、聖書に登場する多くの人もしていません。それにもかかわらず、多くの人が結婚するので、聖書は結婚について沈黙していません。結婚は確かに、人生の最大の変化の一つなのです。

聖書の中で最初に言及されている社会制度が結婚です。神にとって結婚はとても重要だったので、結婚について神がアダムとエバにエデンで言われた言葉が、聖書のほかの箇所に3回登場します。「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」(創2:24、さらにマタ19:5、マコ10:7、エフェ5:31参照)。これらの聖句は、ひとたび人が結婚したなら、彼らの人生における最も重要な関係は、親との関係よりも、伴侶との関係になるべきだ、と教えています。さまざまな理由はあるものの、男女の結婚が、神の子なるイエスと、その花嫁である教会との関係を象徴しているのは(エフェ5:32)、結婚が神にとって極めて重要だからです。

家を建てる際に、人は立ち止まって費用について考える必要があります(ルカ14:28~30)。家庭を築く際には、どれほどもっとそうすべきでしょうか。家は、れんがやモルタル、木や鉄、針金やガラスで建てられます。しかし家庭は、必ずしも物質でないものによって建てられるからです。

問3 人生のあらゆる側面にとって、とりわけ結婚への備えをする者たちにとって重要な性質は何ですか。I コリ13:4~8、ガラ5:22、23

結婚への備えは、私たちから個人的に、個々に始めなければなりません。同時に私たちは、将来の伴侶が自分にとって良い片割れとなるかどうか、注意深く見る必要があります。彼／彼女は一生懸命働く人でしょうか(箴24:30~34)。彼／彼女は怒りやすい人でしょうか(同22:24)。私たちは同じ信仰を持っているでしょうか(IIコリ6:14,15)。私の家族や友人たちは、私の将来の伴侶をどう思っているでしょうか(箴11:14)。私が頼っているのは、信仰でしょうか、それとも感覚だけでしょうか(同3:5、6)。これらの質問に対する答えが、幸福な未来や悲しい一生を意味しうるのです。

◆ 良い結婚生活をいくつか思い浮かべてください。あなたはそこに、ほかの対人関係にも適用できるどのような原則を見いだしますか。

子どもの誕生ほど私たちの人生を変えるものは、そう多くありません。家庭内のあらゆることが変わらざるをえないでしょう。

「若くて生んだ子らは、勇士の手の中の矢。いかに幸いなことか／矢筒をこの矢で満たす人は。町の門で敵と論争するときも／恥をこうむることはない」（詩編127：4、5）。

その一方で、子どもたちは、彼らの世話をするのに必要なあらゆることや、起りうるどんな問題をも解決する方法を親たちに教えてくれる取扱説明書と一緒にやって来るではありません。経験を積んだ親たちでさえ、ときとして、子どもたちの行動、言葉、態度に困惑します。

結婚の備えをするのと同じくらい、親になりたいと望む者たちがこの^{げんしゅく}厳粛な責任に備えることは重要です。

問4 誕生に関する次の物語は独特ですが、親になる備えをしている者たちは、これらの話からどのような原則を得ることができますか。サム上1：27、士師13：7、ルカ1：6、13～17、39～45、46～55、76～79

これらの親たちは、なんと厳粛な責任を負い、厳粛な機会を得たことでしょう。3人は、イスラエルの預言者や指導者の親となり、子どもたちの1人は約束されたメシアの先駆けとなり、子どもたちの1人はキリストになるのです。

しかし、たとえ私たちが子どもが聖書の預言者になるよう運命づけられていないとしても、親たちは人生におけるこの激変に備えるべきです。

「子どもが悪に対する戦いに立派に勝てるように、生まれ出る前からその準備を始めなければならない。もし妊娠中の婦人が放縱、利己主義、短気、苛酷であれば、その性質は子どもの性格に反映し、多くの子どもがほとんど打ち勝つことのできない悪い性癖を遺伝として受けるに至る」（『希望への光——クリスチャン生活編』715ページ、『アドベンチスト・ホーム』283ページ）。

◆ 私たちの保護下にある子どもたちであれ、あるいは、私たちが他者への責任を負っている場合であれ、可能な限り信心深い方法で子育ての責任を果たすために、私たちにできることは何ですか。

「人生の年月は七十年程のものです。健やかな人が八十年を数えても／得るところは労苦と災いにすぎません。瞬く間に時は過ぎ、わたしたちは飛び去ります」(詩編 90:10)。モーセのこの言葉は、止めようのない時の歩みを私たちに思い起こさせます。歳月がやって来ては過ぎ去るにつれ、私たちは自分の体に変化を見、感じます。髪の毛は白くなり、抜け落ち、動きが鈍くなり、疼きや痛みが日常茶飯事になるのです。もし私たちが結婚し、子どもがいるなら、その子どもたちに子どもが生まれ、私たちは孫と楽しく過ごせるかもしれません。人生のそれまでの季節は、私たちが最後の季節の備えをする手助けをしてくれます。

問5 詩編 71 編を読んでください。この詩は、老年への備えについてだけでなく、人生全般について、どのようなことを教えていますか。

詩編 71 編は、人生とともに訪れるさまざまな試練を体験した年配者の詩ですが、彼／彼女はずっと神に信頼し続けてきたので幸福です。年を取る最善の方法は、若いうちから神を信頼することです。大まかに言えば、この詩の作者は、彼の人生の現在の季節に向かう過程で学んだ三つの重要な教訓を述べています。

① **神を個人的に深く知る**——若いときから (17 節)、神は強い避け所 (1,7 節)、救い主です (2 節)。神は岩にして岩 (3 節)、希望にして確信 (5 節)。彼は神の驚くべき御業 (16, 17 節)、神の力 (18 節)、神がなさった優れた御業 (19 節) を語ります。そして、最終的に彼は叫ぶのです。「神よ、誰があなたに並びえましょう」(同) と。聖書を研究し、神が私たちのためにしてくださるすべてのことを熟考するために立ち止まり、日々、神とこのような会話をすることで、神との私たちの体験は深まります。

② **良い習慣を身につける**——十分な栄養、運動、水、日光、休息などは、私たちが人生をより長く、より良く楽しむ助けとなります。この詩編記者が、どのように信頼 (3 節)、賛美 (6 節)、希望 (14 節) の習慣に言及しているか、特に留意してください。

③ **神の使命に対する情熱を持つ**——この詩の中の人物は、年老いて暇になることを心待ちにしていませんでした。引退後も、彼は神を賛美し (8 節)、神について人々に語り続けたいと望んでいました (5～18 節)

◆ 年配の人にとって、年を取ることの利点は何ですか。あなたが若いときには知らなかったことで現在は知っており、若者に分かち合えることは何ですか。

もし私たちが生きて再臨を迎えないとしたら、私たちのだれもが予想できる一つの変化は、あらゆる変化の中で最大のものです。つまり、生から死への変化です。結婚、出産とともに、身内の死ほど、家庭に大きな影響を与える変化があるでしょうか。

問6 Iコリント 15：24～26 を読んでください。これらの聖句は、死についてどのようなことを教えていますか。

言うまでもなく、再三、死は突然に、しかも悲劇的にやって来ます。どれだけ多くの男女や子どもさえもが、ある朝目覚めても、日没までに、眠りのためではなく、死のために目を閉じたことでしょう。または、ある朝目覚めても、日没までに、家族を失ってきたことでしょう。

信仰によってあなたが主と確実に結びつき、彼の義によって一瞬一瞬覆われる以外に（ロマ 3：22 参照）、あなた自身にとっても、あなたの愛する人にとっても、いつやって来るかわからない死に備えることはできません。

その一方で、もしあなたが余命数か月とわかったなら、どうしますか。私たちは、死がいつ私たちを打ち負かすのか、正確にはわからないかもしれませんが、人生の終わりが近づいていることは、わかります。それゆえ、私たち自身や私たちの家族がその不可避なものに備えるというのは、なんと重要なことでしょう。

問7 列王記上 2：1～4 を読んでください。それは、ダビデが息子のソロモンに語った遺言の一部です。私たち自身や私たちの家族の死に備えることに関して、どのような教訓をそこから得ることができますか。

一読して、「馬鹿馬鹿しい限りだ。不倫でバト・シェバを妊娠させたあと、夫のウリヤを殺したダビデが、主の道を歩めなどと息子に言っているぞ（サム下 11 章参照）」と言えなくもありません。一方で、ダビデの言葉に説得力があるのは、まさにその罪と、あとに続いた恐ろしい結果のゆえなのでしょう。間違いなく、彼は彼なりに、多くの悲しみを引き起こした愚行に近づくな、と息子に警告しようとしたのです。つらい経験をして、ダビデは罪の代償に関する苦い教訓をいくつか学びました。そして間違いなく、彼自身が味わった悲しみのいくらかを息子には免れさせてやりたい、と願ったのでした。

もし荒野における古代イスラエルの物語を読み通すなら、神の愛と力の驚くべき啓示にもかかわらず、彼らが大きな変化を前にして、次から次へと間違いを犯す姿を見ることができます。実際、イスラエルの人々がいよいよ約束の地に入ろうとする前に（そして、さらなる大きな変化に遭遇する前に）、モーセは彼らにこう言いました。

「あなたたちは、主がバアル・ペオルでなされたことをその目で見ただけではないか。あなたの神、主はペオルのバアルに従った者をすべてあなたの間から滅ぼされたが、あなたたちの神、主につき従ったあなたたちは皆、今日も生きている。

見よ、わたしがわたしの神、主から命じられたとおり、あなたたちに掟と法を教えたのは、あなたたちがこれから入って行って得る土地でそれを行うためである。あなたたちはそれを忠実に守りなさい。そうすれば、諸国の民にあなたたちの知恵と良識が示され、彼らがこれらすべての掟を聞くとき、『この大いなる国民は確かに知恵があり、賢明な民である』と言うであろう。いつ呼び求めても、近くにおられる我々の神、主のような神を持つ大いなる国民がどこにあるだろうか。またわたしが今日あなたたちに授けるこのすべての律法のように、正しい掟と法を持つ大いなる国民がどこにいるだろうか。

ただひたすら注意してあなた自身に十分気をつけ、目で見ただけを忘れず、生涯心から離すことなく、子や孫たちにも語り伝えなさい」（申4：3～9）。

主が私たちのために成し遂げてくださったことを忘れないというのは、なんと重要なことでしょうか。また、それを他者や後世の人たちに教えること以上に、忘れないための良い方法があるのでしょうか。彼らがこれらのことを自分の子どもたちに教えなければならなかったという点において、いかに家族が重要であったのかということにも注目してください。そして、ペオルでの罪は家庭生活に悪影響しか与えないものでした。「イスラエルに神の刑罰を招いたのは、放縦の罪であった。人をおとしめようとする女の積極性は、バアル・オペルで終わらなかった」（『希望への光——クリスチャン生活編』755 ページ、『アドベンチスト・ホーム』366 ページ）。

話し合いのための質問

- ① 安息日学校のクラスで、結婚、子育て、老年期など、人生の大きな局面を迎えて、あなたがした準備について話してください。その変化は、あなたの家族にどう影響しましたか。あなたは、同じ局面を迎えている人に役立つどんなことを学びましたか。